

ネタジーとともに 山本さんのスピーチ

スバス・チャンドラ・ボースは、印度独立という大業に生涯をかけた人です。

大業をなす人は、さまざまなきびしい試練を越えなければなりません。

最初にボースが取り組んだ3つの試練をご紹介します。

ボースに与えられた第一の試練は、獄中でドイツへの脱出をはかるために自分で自分の体に恐しいチフス菌を注射したことです。まかりまちがえれば死んでしまいます。

第二の試練は冬のハイバル越えです。アフガニスタンのダッカまで50km 最高点1100m、雪と氷の人の通らない間道です。滑って転んだら深い谷底です。

第三の試練はドイツから日本まで87日の海底潜行です。そして冬の印度洋の荒波をずぶぬれになって日本の潜水艦への綱渡りです。

ボースが東京へ着いたのは1943年5月16日です。危険人物であるボースを探していたイギリスはどんなにか驚いたことでしょう。

まず、私が一番印象に残っているのは、1943年7月5日ボースの印度国民軍（I.N.A.）最高司令官就任の大閱兵式です。

シンガポール市庁舎前広場を埋めたI.N.A.1.3万に段上からボースは雄叫びました。

“兵士諸君！

私は暗黒にも光明にも

悲哀にも嘉悦にも

受難にも勝利にも

共に諸君と共にあることを約束する

私が諸君に呈しうるもの飢渴、欠乏、更に進軍また進軍、しかして死以外に何でもない

諸君が私に生死を託して従うなら必ずや諸君を勝利と自由に導くことを確信する

チェロ・チェロ・デリー

ボース・キ・ジャイ！インクラブ・キ・ジャイ！”

会場は、満場歡呼の大合唱でした。

こうしてネタジーはインドが持てなかった軍隊をもつことができました。彼のもとでヒンズー・イスラム・シーク民族が一丸となって戦うようになりました。

1943年10月21日に自由印度仮政府が誕生します。直ちに英米に宣戦布告をしました。女性部隊であるラニ・オブ・ジャンシーも誕生します。ボースはネタジーと呼ばれるようになり、挨拶はジャイヒンドとなりました。

次に、進軍（チャロー・デリー）、インパール戦線の話をしたと思います。

1944年3月27日 ネタジーはミンガラドン練兵場で閲兵して第1師団3個連隊を送りだします。

4月20日、I.N.Aは、インパール、北^{コヒマ}、正面、南^{ウクルル}に出撃しましたが、敵方の頑強な守備に対峙して膠着状態におちいりました。

7月10日、日本軍は作戦中止、撤退しますが、ネタジーは、I.N.A.は作戦を続行する、全滅しても祖国の独立を闘いとる革命軍は進軍を止めないのが本領であると言い張りしました。

河辺司令官はネタジーをこれ以上部下に死を責めるに忍ばずと説得した結果、ネタジー

は”全員死力をつくして撤退せよ”と指令を出して撤退しました。

この作戦に参加したI.N.A.は、2万余、死傷者3千余でした。

インパール戦線で負けた理由は、雨季（夜も昼もドシャ降り、何カ月空に太陽、星を見ない）に補給が全く無くなったこと（食・弾薬・医薬）、

そのため病気（マラリア・アミーバ赤痢・風土病）が蔓延したことです。

ラワジ会戦（1945年1月20日～5月18日）は、日英軍の決戦場となりました。I.N.A.は第2師団3個連隊(7200名)を送り出し、ネタジー自ら前線の士気を鼓舞して回り、兵も意気盛んでしたが、敵の飛行機と戦車2000両に圧倒され、ラングーンは無防備にさらされました。

1945年4月20日、日本軍はビルマ放棄を決定し挨拶もなく逃げてしまいました。ネタジーはラングーンで玉砕を覚悟していましたが、先任のロガナダン少将の説得に翻意します。

ネタジーとI.N.A.部隊は4月24日夜半出発しました。ジャンシー部隊、兵士600名トラック15台の大部隊でした。

街道は連日の豪雨、泥濘、悪路、無秩序、暗黒の頭の上に飛んで来る照明弾。私が、深い溝にはまった車を押し上げていたら一緒に押していたのはネタジーでびっくりしました。

ここで光機関ネタジー護衛兵陸軍一等兵 山田勲氏 の手記をご紹介します。

シッタンは川幅 200m 千満 10m の激流は魔の川です。

シッタンの渡河点につく前に夜が明けたのでジャングルに待機しました。

ボース閣下の両側に立哨している時、「大丈夫だから休め」と言われました。ドイツの鉄帽を被りダスターを着てはるか西方を仰いでおられる姿を今でも忘れられません。

チャロー・デリーの夢が絶えて落ち行く英雄の悲哀な姿、心情察するに余りあるものでした。

さて、永井君の死とジャンシー部隊についてお話しします。

ジャンシー部隊の2艘の筏をつないでいたロープが切れて荒波に流されました。永井君とロープを腰に縛り、暗夜の河を泳いで筏をつかまえました。ロープを結んで岸に上りました。永井君はその晩、濁流を渡り、翌朝爆撃で戦死しました。穴を掘り遺体を毛布で包みました。私は胸が詰まって何もできませんでした。遺体を埋めて手首を切り落として焼いて遺骨をつくり、その遺骨を持ち帰りました。翌日、その遺骨を抱いてモールメンに向かいました。山田は歌を残しています。

戦友の手首を切りて遺骨つくる敵機の去りし暮のジャングル

私の話に戻ります。ここで、私は2泊と3日間、ジャンシー隊の護衛をしましたが、彼女たちは規律よく落ち着いていました。朝は、私にもお茶をサービスしてくれました。おいしいお茶（チャイ）でした。

ネタジーが乗った飛行機は台北で墜落し、ネタジーは陸軍病院で死亡（戦死）しました。1945年8月18日午後10時すぎ、享年48歳でした。

ネタジーから副官ラーマン中佐への最後の言葉をご紹介します。

“君が印度へ帰ったらボースは最後の息を引き取るまで独立のために戦ったと伝えてくれ。私が死んでもわれわれ同胞はこの戦を続けてくれる。インドは近いうちに必ず独立する。”

1947年8月15日、インドは独立しました。

戦勝国イギリスが何故そんなに早く300年の印度統治から撤退したのでしょうか。イギリスのアトリー首相は、“英印軍のインド兵のイギリスに対する忠誠心がチャンドラ・ボースのやった仕事のために低下したためです”と言っています。

戦場における日印軍の敗退がインドの精神的勝利をみちびいたのだと思います。この精神的勝利は、極東・アジア、全世界の植民地に愛国心の火花をつけたのです。ネタジーの愛国心が、印度の独立のみならず、世

界の植民地を解放したのです。20世紀後半は世界の植民地の独立の世紀となりました。

ネタジーは言ったことは必ず実行する尊敬すべき人でした。指揮官であるにもかかわらず戦うときは最前線で、逃げる時は一番最後でした。ネタジーは、自分は死んで兵隊は約束の勝利と自由に導いたのです。